月刊
みんぱく
◉国立民族学博物館
2009
10
月号
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
平成21年10月1日発行　第33巻第10号通巻第385号

◉みんぱくインタビュー

加藤九祚

もくじ

1 エッセイ　世界へ◉世界から
解り合えないことを解り合う
梶田 真章

2 みんぱくインタビュー
加藤 九祚名誉教授に聞く
人と人、人と物との間に橋を架ける

8 モノ・グラフ
ズルナを聴くしあわせ
寺田 吉孝

10 地球ミュージアム紀行
モンスニ峠のピラミッド博物館
湖底に沈んだ歴史を語り継ぐ
菊澤 律子

11 表紙モノ語り
サマルカンドの女性の部屋
加藤 九祚

12 みんぱくインフォメーション

14 万国津々浦々
リン・サオ みんなで育む恋のものがたり
岩佐 光広

15 時論　新論　理想論
収蔵資料情報の共有に向けて
ズニ博物館長の民博訪問
伊藤 敦規

16 多文化をささえる人びと
医療通訳サービスのある病院
りんくう総合医療センター 市立泉佐野病院
吉富 志津代

18 生きもの博物誌
ユーコン川の恵み〈マスノスケ〉
井上 敏昭

20 歳時世相篇
新たな祭りの創生競争
アフリカ、ザンビアにおける伝統の創造
吉田 憲司

22 フィールドで考える
身に覚えのない疑い
石田 慎一郎

24 みんぱくウィークエンドサロン
研究者と話そう
次号予告・編集後記

エッセイ　世界へ◉世界から

解り合えないことを解り合う

梶田 真章（かじた しんしょう）

お釈迦さまは「実にこの世においては、怨みに報いるに怨みを以てしたならば、ついに怨みの息（やむ）むことがない。怨みをすててこそ息む。これは永遠の真理である」と説き、イエス・キリストは「汝の敵を愛せよ」と諭（さとし）したが、人類は今日まで戦争を繰り返してきた。「解っちゃいるけど止められない」のが人間であるというしかない。自己を愛すること、家族を愛すること、国を愛することが人生の喜びの種であると同時に苦しみの原因でもある。愛は、いつ憎しみに変わるか解らない。愛は決して地球を救わず、愛国心が戦争の原因ともなっている。

「人間は自己中心的で煩悩とともに生きざるを得ないので、自己の愚かさを深く自覚して愚か者同士としての仲間意識を焦らずに育ててゆくしかない。この世は特定の対象への愛に生きる世界で、たまに慈悲の心も生ずるが、常に慈悲の実践に生きることができるのは浄土に往生して成仏してからである」と八〇〇年前に日本発祥の普遍宗教である「専修念佛（せんじゅ）」を説いたのが法然と親鸞であった。

神道やユダヤ教などの民族宗教は他の民族との間では戦争の手段となってしまう。世界宗教であるキリスト教、イスラム教、佛教は戦争の手段となってはならないはずだが、聖書を携えながら戦争をするアメリカ合衆国大統領、国民を戦争に駆り立てた第二次世界大戦中の坊主など、宗教が果たすべき役割とは正反対の愚行は枚挙に暇（いとま）がない。国益の為には戦争をするのが政治、如何なる時にも非戦を貫くのが世界宗教の役割のはずである。日本の坊主も情けないが、アメリカやロシアの神父さま、牧師さまには果たすべき役割を果たしていただきたいと思う。

国際紛争、民族紛争の絶えない世界だが、人類共通の悲願は世界の恒久平和であると信じたい。国際的な相互理解とは、各国、各人の事情と意識の違いを認め合うこと、「すぐに解り合える筈だ」ではなく、歴史と文化の違う国に育った者同士、「すぐには解り合えないことを解り合う」、「紛争の解決は暴力、武力によらず、言葉を尽くして対話する」ことが戦争の無い世界に繋がってゆくと思う。隣人でも解り合えないことが多いのだから。お釈迦さまの言葉を各国の為政者に伝えたい。「もしも愚者がみずから愚であると考えれば、すなわち賢者である。愚者でありながら、しかもみずから賢者だと思う者こそ愚者だと言われる」　合掌

1956年、京都市生（か）まれ。1980年、大阪外国語大学ドイツ語科卒業。1984年、京都鹿ケ谷法然院第31代貫主（かんす）に就任、現在に至る。境内で環境学習活動を行なう他、表現者の発表の場やシンポジウムの会場としても寺を開放するなど、現代における寺と佛教者の可能性を追求している。京都市景観・まちづくりセンター評議員、きょうとNPOセンター副理事長。著書に『ありのまま――ていねいに暮らす、楽に生きる。』（リトルモア）、『法然院』（淡交社 共著）など。

みんぱく インタビュー

加藤九祚名誉教授に聞く
人と人、人と物との間に橋を架ける

シベリア抑留生活をロシア語留学にしてしまう知識欲とプラス思考。その奥底に流れるのは、人との縁や絆を大切にするヒューマニズム。民博着任などの節目を「スタートライン」と捉えた学究の徒としての真摯な姿勢とともに加藤名誉教授の旺盛な探求心は、米寿を迎えた今も健在である

聞き手　久保正敏（本誌編集長）

加藤九祚

国立民族学博物館名誉教授。学術博士。一九二二年、韓国慶尚北道に生まれる。上智大学文学部卒業。陸軍工兵少尉として戦後、シベリア抑留生活を四年八カ月経験する。一九七五年から一九八六年まで民博教授を務める。その後、相愛大学、創価大学教授を歴任。『天の蛇　ニコライ・ネフスキーの生涯』（河出書房新社、一九七六年）で大佛次郎賞を受賞。『中央アジア歴史群像』（岩波新書、一九九五年）など著書、訳書多数。

――先生はシベリアや中央アジアの文化史をご専門とされています。シベリアとの出合いはどのようなものだったのでしょうか。

シベリアとの出合いは、四年八カ月におよぶ抑留生活のなかで、ロシア語を猛勉強したのがそもそものはじまりです。

八月一五日に戦争が終わって、私たちが武装解除したのが二〇日ごろでした。ウラジオストクを通って日本へ帰れると言われて、多くの日本人もそのことを信じていたようでした。

私はドイツ語ができたので、ドイツ語が話せる西部戦線帰りのロシア人将校に聞いてみたら、「君たちは数年シベリアにいることになるだろう」と言うんですね。このままでは、生きるか死ぬかもわからぬままになってしまうのではないか。死ぬなら死ぬで、自分の状況を知ったうえで死にたい。一緒にいる人たちにも状況を伝えてあげたい。そのためには、ロシア語を勉強しないとどうにもならないと思いました。

――普通は捕虜になると、悲観したり、絶望的になってしまったりするのではないでしょうか。

そう。捕虜になっても、その日その日を過ごせればいいとなってしまうんだけど、そのあいだも勉強していましたからね。

捕虜尋問用会話集を教科書に

出兵する前、上智大学予科に通っていたころは、哲学を志していました。哲学者の三木清の著作に『パスカルにおける人間の研究』という名著があって、そのなかにいまでも忘れられない文句があります。人間は自然のなかでは弱いもので、これを殺すにはたいした武器もいらない。一滴の水でも足りる。しかし、人間は自然が偉大であることを知っているという意味において、自然よりはるかに勝るという内容です。知識や、知ることがいかに大事であるかということですね。

私はそうしたことがずっと頭のなかにありました。だから、自分が置かれている状況を知りたいと思ってロシア語を勉強したんです。

私たちが終戦を迎えた敦化（とっか）という中国の東北部にある都市の飛行場に、ハルピンの図書館から運ばれて来たと思うんですが、貨車一杯の本が山のように積まれていました。そのなかに、陸軍関係の本を出版していた偕行社が刊行したロシアの捕虜尋問用の日露対訳会話集がありました。それがロシア語との出合いでした。あとはロシア人の将校をつかまえて、片っ端から聞いていきました。私は尋問されるほうでしたけどね（笑）。

探検家プルジェワリスキーの墓をたずねる〈キルギスのイッシク・クル湖岸、2007年〉

汽車でシベリアに送られる途中、駅で長いあいだ止まることがありました。ときには二晩も三晩も止まるんですよ。そのとき、ロシア人の子どもたちが寄ってきたんです。私は、学校のテキストはあるかと聞きました。ノートやいろいろなものと交換して、ロシア語の教科書を手に入れたんです。それから、人に頼りながら頭から数ページ覚えました。そんなふうにして、ロシア語の勉強を続けました。

一年くらいしたら、ずいぶん上手になりました。簡単なことなら通訳もできるようになったんです。そうしたら、「お前はどこでロシア語を勉強したのか」とスパイの疑いをかけられてしまいました。ずいぶん時間はかかりましたが、結局は戦犯にならなくてすみました。

――シベリア抑留を「シベリア大学」と呼んで、抑留生活をプラスに考えられたそうですね。

プラスに考えられるようになったのは、日本に帰ってからです。帰国してから、アルバイトをしながら上智大学ドイツ文学科に通いました。帝政ロシアは革命によって倒されてソ連になりますが、両者の思想のあいだにはつながりがあるのか、つまり帝政ロシアとソ連の思想における連続と断絶をテーマにしようとしたのですが、まとまった資料がなくてどうにもなりませんでした。

発想の転換「シベリアをフィールドにする」

当時、梅棹忠夫さんや川喜田二郎さんたちによるアフリカやヒマラヤへの現地調査が新聞に載っていたりして、私もこのような調査に加われたらいいんだけれど、高嶺の花だと思っていました。

そのころいろいろな探検記を読んでいて、そのなかにプルジェワリスキーというロシアの有名な中央アジア探検家がいました。彼がシベリアを調査した旅行記を読んでいるうちに、「そうだ、私はシベリアに行ったことがあるんだから、そこをフィールドと考えたらいいんじゃないか」と思い

ついたんです。これはたいへんな発見でした。ソ連を憎んだり、シベリアに行かされた運命を呪ったりしてもしかたがない。あるがままを受け入れて、そこからなにができるのかが、私の生きる道ではないかと思ったのです。そう思えたことが、自分でもたいへん嬉しくてね。さっそくシベリアの歴史に関する文献を読みはじめました。

私は、なにかを知りたいという欲求の強い人間だと思います。今日あるのも知識欲のおかげだと思います。私はとても貧乏な家に育ちました。でも、親は本をたくさんもっていた。

親父が、「俺は勉強したかったけど、できなかった」と言っていたことを思い出します。私もいつかその本が読めるようになりたいという気持ちがずっとありました。子どもの周りには必ずいい本を置くべきです。読めなくてもいい。ただ、子どもに、いつかこの本が読めるようになりたい、内容を知りたい、そういう思いを抱かせることができれば十分です。邪魔になるから本を捨てるという人がいるが、そうじゃなくて、邪魔になるからこそ置かなきゃならないんです。

知識とは新しいことです。知識欲とは、つまり新しいことを知りたいという欲求ですから、新しさにも関心があったと思います。私がこれまでやってきたことは計画的なものではなく、知識欲からきているんです。

民博がスタート台

民博には、尊敬する梅棹忠夫さんやほかの先生方からのお誘いで、一九七五年に着任しました。ソ連に住む諸民族の伝統的物質文化の資料を収集することを期待されたと思います。それまでに何度も旅行していましたし、そこにいろんな人間関係ができていましたからね。中央・北アジア展示の一般公開ぎりぎりまで収集していました。ある先生がちらっと「間にあわないかと思った」と言っておられましたが、間にあったのでずいぶんと喜ばれました。

梅棹忠夫初代館長（左端）とともにモンゴルで調査する加藤名誉教授（右端）。〈カラコルム、1982年 提供・庄司博史〉

民博に誘っていただいたおかげで、私がこれまでやってきたことにお墨付きをいただいたという思いがあります。加藤は使える人間だと。

私は人生のなかで何度か、研究者としては近道ではない道を歩んできました。ひとつは中学校に行かず、職工学校に行ったことです。そのため上智大学予科に行くには検定試験に受からなければなりませんでした。入学できたとき、「ああ、これで他の人と同じスタート台に立てた」と思いました。民博に入れたときも、ほかの人が東大出身であろうと京大出身であろうと、私も同じ土俵に立てたんだと思いました。

――先生が収集された資料を探してみると、二八〇〇点あまりあります。収集の際の苦労話などはありますか。

中央アジアで収集したものは移送しやすい衣類が多かったのですが、大きなテントや馬車なども収集しました。馬車はパーツごとに分解して、それぞれに袋に入れ、縫いとめました。それを飛行機に載せ、モスクワ空港に着いたときには、もう夜も遅くなっていました。保管してもらうところもないから、空港のなかの閉めかけの店に持っていって、「すみませんが明日の朝まで預かってくれませんか」とお願いして、なんとか店の前に置かせてもらうことになりました。

いまでも心残りは、門扉を収集できなかったことです。中央アジアには門扉を大事にする習慣があるんです。桑の木かなにかでつくられていて、幾何学的な彫刻が施してあるものです。いいものを見つけたので買おうとしたら、じつはその家は病気で寝ているおばあさん一人で、近所の人が面倒を見ているんですね。近所の人がなんでも売ったほうがいいので持っていけと言うんだけど、いくらなんでも病気で寝ているおばあさんの家の門扉をはずして持っていくことはできませんでした。

いまだに門扉を収集したいという気持ちは残っています。私が飛行機で運びますので買い取ってほしいと、民博に頼みたいんだけど（笑）。

資料収集も現地の人の助けがあってできたことですね。男であれ女であれ、人間関係が大事であると痛感しました。私は人間が好きなんです。とりわけ女性が好きなんです（笑）。というのも、女性は、その土地と密着していると思うからです。男性は、自分も含めて土地と離れたがる傾向があると思うんですよ。だから、その土地でなにをするにしても、女性に援助してもらったほうが円滑にいく。資料収集をしていてよくわかりました。

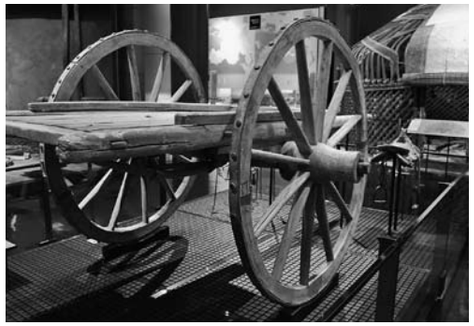
民博を定年（一九八六年）になったのも、新たなスタート台でしたね。さいわい親や、先生方のおかげで今日があるわけですが、なにはなくとも丈夫な体に生んでくれたこと、知識欲のある子に育ててくれたこと、この点をいつも両親に感謝しますね。

自分にできることはなにか

――現在も続けておられる発掘や考古学への関心はいつごろもたれたのでしょうか。

考古学への関心は民博を定年になってからです。これまでずいぶんと書籍を翻訳していくうちに、私自身も新しいことをしたいという気になりました。考古学は、発掘品の研究もありますが、掘り出すだけでも十分新しいことができると思ったのです。発掘の労をいとわないことと、現地の人とのつながり、そしてわずかなお金があれば可能ではないか。考古学や仏教の知識に足りない部分があるなら、そこは専門家にみてもらうとして、ほかの人ができないことをしたいと思い、発掘にたどり着きました。

それまでやっていた翻訳も価値のあることだと思っています。翻訳とは、橋を架ける仕事だと思うんですよ。私は陸軍の工兵出身で、これも橋を架ける仕事です。華々しい仕事をしたくないわけではないけど、それは少数の運のいい人ができることだから、自分は裏にまわって、橋を架ける仕事ができればいいのではないかと思います。国際交流というのも、人と人との橋を架けることではないのかと。


中央・北アジア展示にあるウズベキスタンで収集した二輪の馬車

とにかく、私ができることはなにかを考え、できることをしたいのです。

考古学は、ものによって語らしめる側面があります。しかし、物事は人間なしにはありえません。ものを語るときは必ず人間と抱き合わせて考えるという姿勢をもちたいと思うのです。考古学でも、それを掘った人は誰で、どのような状況で掘ったのかも考える。出てきたものだけでは、たとえすごい黄金だとか、すばらしいものだとしても、感銘を受けません。その裏にある学者の姿勢や生き方を、いつも一緒に考えるんです。

その背景から人間の性（さが）が見えてくるんです。善かれ悪しかれ、すべてのものは、人間をめぐってあるわけです。本を読んでも、人間のことが書いてないものは楽しくないですね。

――どうしてウズベキスタンを選ばれたのでしょうか。

ウズベキスタンにはおもしろい仏教遺跡が多かったのです。民博の資料を収集するときにも、ウズベキスタンの人にお世話になっていましたし、人間関係もできていました。ロシア科学アカデミーの民族学研究所と民博が提携していたのですが、そこで知り合った研究者がウズベキスタンと関係が深かったこともあります。ウズベキスタンは中央アジアでいちばん人口が多く、遺跡も多く、いろいろな要素があって発掘をすることになりました。

一九八八年に奈良でおこなわれた「ならシルクロード博覧会」で、ソ連関係のもの、とくに仏教関係のものの展示にかかわりました。そのためにウズベキスタンの首都タシケントに行ったら、遺跡から発掘されたばかりの仏教彫刻を見せられたんです。これはすごい、ぜひ持ち帰りたいということになって、すいすいと話が進んで、大型の仏像などを展示することができました。

同じ年に、東京の創価大学からシルクロードに関する講座を開講するので、こちらにこないかという話がありました。同時に、その創価大学創立二〇周年記念になにかよい事業はないかと相談されました。それなら、ウズベキスタンの仏教遺跡を発掘する調査団を組むのはどうだと提案をしました。こうして六年間、クシャン朝（一～三世紀）の仏教遺跡であるダルヴェルジンテパの発掘に携わることになりました。

その大学を定年後、これからなにをしようかと考えて、年金を貯めて、ウズベキスタンに毎年一、二カ月きて発掘すれば楽しいんじゃないかと思ったんですね。そこでダルヴェルジンテパの近くに宿泊施設をつくることにしました。それが「加藤の家」です。私の家内が出資してくれました。彼女はじつは、私になかなか小遣いをくれないんですよ（笑）。でも、家をつくろうと言ったら、「出しましょう」と言ってくれました。

一九九八年三月から、「加藤の家」でダルヴェ

ルジンテパを発掘するつもりでいました。そんなとき、知り合いのウズベク人の考古学者から、「あなたはカラテパという大規模な仏教遺跡に関心をもっていたけど、いまでもやる気があるなら、ダルヴェルジンテパをやめてカラテパを発掘してはどうか」と連絡がきました。カラテパはアフガニスタンの国境近く、テルメズという町の近郊にある、中央アジアの歴史においてとても重要な仏教遺跡です。憧れはありましたが私には身にあまることだと思いました。

生きている限り続く発掘作業

ダルヴェルジンテパとカラテパは発掘の環境がぜんぜん違うんです。ダルヴェルジンテパは、遺跡の上に一〇〇〇年にもわたる層位が積もっていて、仏教遺跡にたどりつくにはその層を取り除かねばなりません。しかもただ除けばよいというわけではなくて、なにかを発掘できたら報告しなければならないんです。たいへんな手間がかかります。土壌も粘土質で固いのです。

ところがカラテパには仏教遺跡だけが残っていて、仏教以前にも、それ以後もなにもありません。しかも砂地だから掘りやすいのです。やっぱり一年だけでもやってみようと思って発掘をはじめたら、三日目で大きな仏塔（ストゥーパ）の頭の部分が出てきました。これは大きな発見ができるかもしれないと思いました。

発掘作業を継続するために、奈良の薬師寺が事務局になり後援会をつくっていただきました。発掘をはじめて今年で一一年目になりますが、その一年目に二回発掘に行っていますが、年に二回発掘に行っていますが、おかげです。春と秋、年に二回発掘に行っています。大学などで科研費をもらっても、三年か四年で終わってしまいます。でもこれはまだ続けられます。生きている限り続くんです。人の縁というのはすごいです。私はこれまで、人の縁に恵まれてきたと思います。

――ウズベキスタンの遺跡は、ソ連時代は発掘はおこなわれていなかったんですか。

ソ連時代のほうが熱心でした。マルクス主義の影響です。マルクス主義の考え方では、初めに原始時代があって、奴隷制、封建制、資本主義に発展してきたとされています。仏教時代は奴隷制にあたるので、その証拠を見つけるために熱心に遺跡発掘をおこなったんです。

カラテパは広い遺跡ですので、ソ連時代にも発掘がおこなわれていましたが、私はその部分は置いておいて、手つかずのところから発掘をはじめました。ほかにもいまでも手つかずになっている遺跡がたくさんあります。ソ連が解体してからは、ウズベキスタン政府としてはお金を出せないので、あまり熱心ではありません。外国人の出資による発掘はソ連崩壊前でしたが、私が最初でした。その後、ドイツやイタリア、フランス、アメリカも入ってきました。私のほかにも若い日本人たちが、別の遺跡を発掘しています。

民族と文化の交流の地だからこそ……

カラテパの大仏塔の西側一帯は、まったく手つかずの状態においてあるんですよ。ここはいろいろおもしろいものが発見できる可能性があるんですが、一緒に発掘している人に、「今度はあそこを掘ろうよ」と言っても、「いや、次の世代のために残しておいてもいいんじゃないか」と言うのです。思うに、私も歳だし、私が死んだときに、ほかの人への目玉としてとっておこうとしているんじゃないかと（笑）。ところが、おっとどっこいまだ元気ですし、来年からやろうよと言ってみたら、やりましょうと言っていました。向こうもあきらめたみたいです。

――二〇〇一年から毎年、『アイハヌム』という雑誌を個人で刊行されています。タイトルのいわれを教えてください。

アイハヌムはテュルク語で、月を表すアイと女性の尊称ハヌムをつないだ言葉で、「月の令婦人」とか「月姫」という意味になります。紀元前四世紀に中央アジアにアレキサンダー大王が遠征してきて、そのあと入ってきたギリシャ人たちがグレコ・バクトリア王国をつくり、ヘレニズム文化が花開きます。その時代に、パミールの西、現在のアフガニスタンとタジキスタンの国境近くに、ギリシャのポリス（都市国家）そっくりの都市がつくられました。それがアイハヌムです。円形劇場など、ギリシャ的なものがすべて揃っていました。

ギリシャ人は、そんなところまで入ってきていたんですね。そういうものの影響があって今日の中央アジアがあるわけで、文明の交流は遠い昔から強いかたちであったのだと。その象徴としてアイハヌムと名付けたんです。音の響きもいいし、豊饒の女神の加護を受けられると思って（笑）。『アイハヌム』は、今年一一月に財団法人関科学技術振興記念財団からパピルス賞をいただくことになりました。

――中央アジアはシルクロードもあって、いろんな民族の往来がある地域ですね。

世界史的にみると、まず西からギリシャ人がやってきました。次に南から仏教とともにインド人が入ってくる。ギリシャ人はそうとうな数がきていたと思うけど、インド人と溶け込んでしまったわけです。そのあとはアラブ人が入ってきてイスラームがもたらされました。そして、次は東からトルコ（テュルク）人やモンゴル人が数波にわたって大量に入ってきます。一九世紀になると、西からロシア人がやってきます。

もともとこの地にはタジク人の祖先であるイラン系の人びとが住んでいましたが、同化されたり、山へ追いやられたりしたといいます。タジク人のなかにはいまでも、「ウズベク人をはじめとするトルコ系民族やモンゴル人が外からやってきたおかげで、俺たちはこうして山に追いやられているんだ」と主張している人がいます。文化的にも、ウズベク人に奪われたと言わんばかりのことを言っていて、仲が悪いんです。

ダルヴェルジンテパに自費で建設した「加藤の家」

カラテパ遺跡の最初の発掘で発見したストゥーパ（仏塔）の基壇部分〈2008年〉

民族、国家を越えて結ばれる世界

でも、いまさらそんなこと言っても、なにもはじまりません。ウズベク人とおおいにわたりあって、彼らと力をあわせるほうが、みんなの生活も良くなると思います。でも、タジキスタン政府の政策はそうではなく、ようするに、俺たちはアーリア系で偉大だと幻想をいだかせるようなやり方です。為政者が民族を統一するにはそういう方法しかないのかもしれません。

ウズベク人の学者のなかには、トルコ系の民族が何千年も前からこの地にいたと書いている人もいます。それはタジクに対抗するために書いたんでしょう。けど、その方向じゃだめなんですよね、どっちが古いかを競うなんて。

――過去のことにとらわれず、事実は事実で、民族が混ざり合ったことをプラスに転じればいいですね。

物事にはすべてに裏表があります。マイナスに見れば、全部マイナスに見えてきます。中央アジアのそれぞれの民族がみんな独立してもあまり意味はないし、一握りの人しかいい思いをしないのではないでしょうか。

江上波夫先生（故人・考古学者）が、「いつか国家がなくなる日がくるのが待ち遠しい」と言っておられました。国家は民族とも強く結びついていますが、民族の独立意識が強すぎることがいろいろな問題の原因のひとつだと思います。

善かれ悪しかれEUという国家を越えて結びつく試みもあります。アジアにしても、台湾、韓国、日本、インドネシアなど、強い独立意識だけでは経済的に繁栄するのは難しいと思うのですよ。経済的に互いが結びついていかなければならない。そのためにも、政治的には緩やかな関係を結ばなければならないと思います。日本も一億の人口をもって生活を守るには、ほかの国ともっと仲良くしなければならないと、私は思います。

――ますますお元気な加藤先生に力を分けていただいた思いです。ありがとうございました。

モノ・グラフ

ズルナを聴くしあわせ

寺田吉孝（てらだ よしたか）
民博 民族文化研究部
民族音楽学専攻。音楽とアイデンティティの関係について、おもにアジアの事例を中心に調査している。ここ数年は、新しい音楽展示にむけて世界各地のダブルリード楽器を集めている。

ズルナを吹くサミール。左腕を少し上にあげて演奏するのは、彼のこだわりのポーズ

サミールから購入したズルナ。来年3月にオープンする新しい音楽展示で紹介する予定

二〇〇六年一一月、私はズルナとよばれる楽器を収集するためにブルガリアに向かった。

ズルナは、円錐形の木管に葦から作るリードをつけて演奏する楽器。リードが二重になっているので英語ではダブルリードとよばれ、二枚のリードのあいだに息を吹き込んでリードを振動させて音をだす。西洋のオーボエの原型と考えてよい。

皮膚を突き刺す音

ズルナ型の楽器は、日本では珍しいが、ユーラシアを中心として、アフリカ、アメリカの広大な地域で頻繁に演奏されている。そのほっそりした胴からは想像もつかない大きな音がする。しかも皮膚を突き刺すような鋭い音である。ズルナに負けない音量の両面太鼓との組み合わせで演奏されることが多い。

ブルガリアでは、タパンという太鼓とセットになっていて、結婚式や割礼儀礼、新年の祭礼などに欠かせない。

この楽器の天才的な演奏家がいると教えてくれたのは、首都ソフィアにあるブルガリア科学院の音楽研究者夫妻。この音楽を一〇年以上も調べていて、村の楽師たちとは家族ぐるみの付き合いをしている。彼らに同行をお願いして、「天才」サミール・クルトフが住むブルガリア南東部の村カヴラキロヴォを訪ねた。

音の世界を自在に飛び回る

サミールの父親で、自身も一世を風靡（ふうび）したズルナ奏者であるデムコの家で落ちあった。音楽研究者夫妻との再会を祝した飲み食いが一段落すると、「そろそろやるか」といった感じでサミールが立ちあがる。家の前に椅子を三つ並べ、サミールを真中にして両脇にもズルナ奏者が座る。この地域では一人のソロ奏者（マイストロ）に対して一～三人のズルナ奏者が伴奏（グラシュニク）を受けもつ。太鼓奏者は横で立ったまま演奏する。

サミールの演奏は、すさまじい。言葉にするとあっけないが、他にどのように表現したらよいのかわからない。まったくお手上げである。

初めてサミールを紹介されたとき、私は彼の目の鋭さと凄味に少したじろいだ。その印象は、しかし、彼の音を聞くと妙に納得できるものとなった。私は仕事がら優れた演奏家に出会うことも多いが、これほど魂を揺さぶられる音は久しぶりだ。超人的な指さばきもさることながら、延々と続く演奏中、一度たりとも集中力が途切れないのがすばらしい。サミールが演奏するズルナは、彼の体の一部となって自由自在に音の世界を飛び回っているようだった。

アンサンブルの演奏風景。タパン（太鼓）の胴体と打面は合成素材製だ

たばこの火で焦げ目をつけるとリードは長持ちする

迫害と厳しい現実を背負って生きる

ブルガリアにズルナが伝えられたのは一四世紀ごろ。ロマの楽師が伝えたという説が有力だ。ロマは、ジプシーの名称で広く知られる人びとで、北西インドから遅くとも一〇世紀に西に移動しはじめ、数世紀かけてヨーロッパに到達した人びとの末裔であると考えられている。ズルナの起源や伝播の経路には諸説があるが、いずれにせよロマとズルナの付き合いは深く長い。現在でもブルガリアのズルナ奏者は、サミールを含めほぼ全員がロマの出身である。

ロマの楽師たちは、楽譜など書かれたものを一切使わない。すべてを聞いて覚えるのだ。「こんな曲もできるんだよ」と言って演奏してくれたのは、バッハの管弦楽組曲の一曲。選曲にも驚かされたが、携帯電話の着メロで覚えたと聞き再びびっくり。

彼らはどんな音楽でもこうやって自分たちの演目にしてしまう。宗教や民族の異なる聴衆の要求にこたえなければならない彼らが培った技術である。

サミールは私たちを村のはずれにある墓地に連れて行ってくれた。彼の敬愛する叔母がここに眠っているからだ。しかし、墓地に入るとその前方がブルガリア人用で、ロマの人たちの墓は、その先の少し奥まった場所にあった。埋葬される場所も峻別されているのだ。

この事実だけからでも、ロマたちが窖易には言い表せない迫害の歴史や厳しい現実を背負って生きていることがわかる。しかし、サミールはロマとして生きる苦しさには触れない。叔母の墓のそばに座り、彼女の激励の言葉が今でも彼を支えていること、演奏に集中すると神とつながっている気がするときがあることなどを、演奏の激しさとは対照的な静かな口調で語ってくれた。

ほとんどの楽師は副業を持つ。馬の世話はデムコの日課である

取材に同行してくれたロザンカ・ペイチェヴァ（左）とヴェンツィスラフ・ディモフ（右）の夫妻。中央はデムコ

＊

ソフィアに戻る前夜、地域の主だったズルナ奏者が酒場に集まってくれた。雇い主や観客のことを考えなくてよい仲間同士の気楽な演奏。だが、和気あいあいとした雰囲気のなかにも、ライバルを意識した緊張感がみなぎる。サミールの演奏も、このような優れた演奏家たちとの競争に支えられているに違いない。

すばらしいズルナ奏者たちにサスティペ（乾杯）！

モンスニ峠のピラミッド博物館／フランス・サヴォワ地方

湖底に沈んだ歴史を語り継ぐ

ダム建設によって美しいアルプスの山々の真ん中に出現した人工湖。そのほとりには意外な形の建物が……

同じ部屋を反対側から見たところ。奥に白く見えているのがこの地域の立体模型〈写真2〉

博物館の全景〈提供・David Gill〉

モンスニ峠はイタリアとフランスの国境に位置し、トリノからモダーヌを経てリヨンにつながるアルプス越えの要所である。ハンニバルが象をつれてこの峠を通ったとか通らないとか、カール大帝がこの峠を越えてスーザのランゴバルト王国を攻め、教皇アドリアヌスを救ったとか、歴史的記録にはこと欠かない。

設置はフランス電力公社

かのナポレオンも、エジプト遠征の帰りにこの峠を越えたが、そのときにこの地にピラミッドを建てると誓ったとか。しかし、それが実現したのは約一五〇年後の一九六八年、建てたのはフランス電力公社（EDF）であった。目的は、ダム建設のためにできたモンスニ湖一帯に関する記録を残すこと、そして湖底に沈んだ集落の追悼のためである。

したがって、このピラミッド博物館、エジプトに関連するものが展示してあるわけではない。かわりにこの地域の人びとの暮らしを物語る品々、冬のアルプス越え、イタリア領時代につくられた現フランス領にある防御要塞のこと、ダム建設に関する情報と湖底に消えた修道院の宿坊やアルプスの別荘に関する話がいっぱいつまっている。

めりはりのある展示場

ピラミッドの底辺の一辺に入口があるこの小さな博物館の展示場は一階のみ。ピラミッドの軸を中心に反時計まわりに一周して入口の反対側から戻ってくる、というシンプルな順路になっている。

展示場は三つのセクションに分かれている。

ひとつめは歴史概観。といっても、真ん中におかれた地域の模型、その両側にパネルが重なるだけ。それぞれのパネルには、古い順に年代と人名が記されており、端から全体をみると簡単な年表のよう（写真1）。「年表」中の各出来事の詳細は無料のオーディオガイドで聞くことができる。豊かな歴史をあえてシンプルに展示し、小さな空間にしっかり間をとった展示方法が印象的であった（写真2）。

地域の暮らしを雄弁に語る

ふたつめのセクションには、馬具やマネキンに着付けた女性の衣服一式、チーズ造りの道具など、この地域の歴史や生活にちなんだ「もの」が展示されている。一部透明板となった床下に埋蔵品が見えるなど、気の利いた演出が散見された。

三つめの部屋はコンピュータや映像などの端末がたくさん並ぶ情報室。アルプス越えやダムの開発などに関する映像を見ることができる。いずれも規模は小さいながら内容が充実しており、全部見るには意外に時間がかかった。

標高二一〇〇メートルの地に静かにたたずむ小粒だがぴりっと辛いこの博物館、「夏季のみ」という開館期間が毎年六月半ばから八月末と短いことも、この地域の人びとの暮らしの側面を雄弁に物語ってはいまいか。

歴史を物語る展示室。入口側からみると年代と人名が並んで年表のよう。詳細を聞きたいときにはオーディオガイドで解説を聞くことができる〈写真1〉

菊澤律子（きくさわ りつこ）
民博 先端人類科学研究部
専門は言語学。オーストロネシア諸語、オセアニア先史研究。文法構造の史的変遷に関する研究、言語をとおした先史文化研究などに関心をもつ。サヴォワへは第一一回国際オーストロネシア言語学会（二〇〇九年七月）出席のため訪れた。

表紙モノ語り

サマルカンドの女性の部屋

民族：ウズベク
地域：中央アジア
1982年製作、標本番号:H105531

加藤九祚（かとうきゅうぞう）
民博　名誉教授

中央・北アジア展示に再現されたこの部屋は、サマルカンドにあった住居の一部である。実際に展示場へ足を運んだ際には、近くにある「タシケントの民家」模型とあわせて見て欲しい。同じオアシス都市の住居としての特徴がよく見てとれる。外の通りとは厚い粘土の壁で仕切られ、入口は木の扉。中庭を囲むように部屋が並んでいる。

住居の中は「タシカリ（外）」とよばれる男性の部屋、「イチカリ（内）」とよばれる女性の部屋、「メフモンホナ」とよばれる客間の3つにわかれる。かつては来客にも女性は顔を見せずイチカリ＝奥の間にひっこんだままであった。

展示場では、来館者は中庭の方から女性の部屋をのぞいてみることができる。手前には湯沸かし用のかまどがある。その奥のステップから現地では靴をぬいであがる部屋の中に、色あざやかな布や、日本のこたつと同じく卓の下に炭をいれて利用する暖房器具「サンダル」が見える。水差しなどの食器が飾られた壁のくぼみは、大型の家具のかわりに生活用具を収める場所として使われていた。部屋の向かって左側、仕事場としてつかう「アイヴァン」とよばれるテラスには、糸車、ゆりかご「ベシク」が展示されている。ブリキ細工でおおわれた木箱「スンドゥク」は、嫁入り道具として女性が身の回りの品々を詰め込んで持参したものである。

この展示資料の民族名にはウズベクとあるが、トルコ系のウズベク人、ペルシア系のタジク人の別なく、二〇世紀初頭のオアシス都市に住む裕福な家庭の生活様式をあらわしているといえる。当時は「民族」の意識はそれほど強くなく、どちらかというとサマルカンドやブハラという都市に結びついた「サマルカンド人」「ブハラ人」などの認識がもたれていたという。

特別展

「自然のこえ命のかたち―カナダ先住民の生みだす美」

会期　一二月八日(火)まで
会場　特別展示場
※研究者によるギャラリートークを左記の土・日曜日および祝日におこないます。
実施日　一〇月一一日、一二日、一七日、一八日、二五日、三一日
時間　一三時三〇分～一四時、一五時～一五時三〇分

■関連イベント

「北西海岸先住民の權(かい)づくり」
実施日　一〇月一一日(日)

「イロコイの仮面づくり」
実施日　一〇月一八日(日)

「北西海岸先住民の木箱づくり」
実施日　一〇月二五日(日)
時間　一三時～一五時三〇分
会場　国立民族学博物館内
定員　二〇名(申し込み先着順)
実費　三五〇円
参加申し込み方法
タイトル・実施日・参加人数・参加者氏名・年齢・代表者の郵便番号と住所、電話またはFAX番号を書いて左記「ワークショップ(カナダ)係」までお申し込みください。
なお、小学校三年生以下の方は保護者同伴でご参加ください。
E-mail:workshop@idc.minpaku.ac.jp
FAX〇六―六八七八―七五二三

＊

たんぽぽ少年少女合唱団公演「日本とカナダの歌と遊び」
実施日　一一月一日(日)
時間　一三時三〇分～一四時三〇分
会場　本館一階 エントランス
参加費　無料

企画展

「点字の考案者ルイ・ブライユ生誕二〇〇年記念…点天展…」

会期　一一月二四日(火)まで
会場　常設展示場内

■関連イベント

①「石創画ワークショップ―石で絵を描こう」
実施日　一〇月三日(土)
会場　第三セミナー室

②「点字アート・ワークショップ―点字をモチーフに自由造形」
実施日　一〇月二五日(日)
会場　第五セミナー室

③「バードカービング・ワークショップ―木で小鳥を作ろう」
実施日　一〇月三一日(土)

＊

会場　第三セミナー室
時間　一三時三〇分～一六時
定員　二〇名(申し込み先着順)
実費　五〇〇円
参加申し込み方法
タイトル・実施日・参加人数・参加者氏名・年齢・代表者の電話番号を書いて左記「ワークショップ(点天展)係」までお申し込みください。
なお、①・②は未就学児、③は小学二年生以下の方は保護者同伴でご参加ください。
E-mail:workshop@idc.minpaku.ac.jp
特別展・企画展 関連イベントのお問い合わせ
情報企画課情報企画係
電話　〇六―六八七八―八五三一
(平日九時～一七時)

◆公開フォーラム「世界の博物館二〇〇九」
実施日　一一月三日(火)
時間　一三時～一七時一五分
会場　第五セミナー室
定員　七〇名(申し込み先着順)
参加費　無料
お問い合せ
「博物館学集中コース」事務局
電話　〇六―六八七八―八二五〇
(平日九時～一七時)

◆みんぱく映画会 特別展関連「地球交響曲(ガイアシンフォニー)第三番」
実施日　一〇月二四日(土)
時間　一三時三〇分～一六時三〇分(開場一三時)
会場　講堂
定員　四五〇名(当日先着順)
参加費　無料

◆みんぱくワールド・シネマ「そして、私たちは愛に帰る」
実施日　一〇月三一日(土)
時間　一三時三〇分～一六時(開場一三時)
会場　講堂
定員　四五〇名　(整理番号順)
参加費　無料
＊当日一〇時より会場入口にて整理券配布。
お問い合わせ
広報企画室企画連携係
電話　〇六―六八七八―八二二〇
(平日九時～一七時)

◆総合研究大学院大学 文化科学研究科 開設二十周年記念学術交流フォーラム「極限の文化―人はどこで生きているか 生きられるか」

『ポスター発表』
掲示期間　一〇月一日(木)～二〇日(火)
会場　本館一階 エントランス
※発表者による説明をおこないます。
実施日　一〇月一七日(土)
時間　一五時三〇分～一七時

『学術交流フォーラム』
実施日　一〇月一八日(日)
時間　一〇時三〇分～一六時三〇分(予定)
会場　第五セミナー室
定員　九〇名(当日先着順)
参加費　無料
お問い合せ
研究協力課研究協力係(大学院担当)
電話　〇六―六八七八―八二三六
(平日九時～一七時)

●音楽展示・言語展示場が改修のため閉鎖になります
期間　一一月二六日(木)～平成二二年三月一六日(火)まで(予定)

●無料観覧日のお知らせ
一一月三日(火・祝)の文化の日は、常設展・特別展を無料で観覧いただけます。ただし、自然文化園を通行される場合は、入園料が必要です。
＊詳細については、みんぱくホームページをご覧ください。

刊行物紹介

■中牧弘允　森茂岳雄　多田孝志　編著
『学校と博物館でつくる国際理解教育』
水声社
定価：2,940円(税込)

学校・博物館・学会の3者が連携・協働することでどのような学びが創造できるのか。国際理解の資料の宝庫である国立民族学博物館を舞台にした総合的な学習の時間や社会科の授業実践、教員研修の実例を紹介し、そこから浮かび上がる今後の課題について検討する。

■山本紀夫　編
『ドメスティケーション―その民族生物学的研究―』
(国立民族博物館調査報告No.84)

■波平恵美子　編
『健康・医療・身体・生殖に関する医療人類学の応用学的研究』
(国立民族博物館調査報告No.85)

友の会

友の会講演会　会場●国立民族学博物館　第5セミナー室
定員●96名(当日先着順、会員証をご提示ください)

第377回　11月7日(土)
時間●14:00～15:30(13:30開場)
人類学者×人類学者(5)
泉靖一と戦後日本の人類学研究のあゆみ―南米研究を中心に
講師　関雄二(研究戦略センター教授)
東大に日本初の人類学講座をひらいた泉靖一。朝鮮半島での民族調査から始まり、アンデスの考古学調査を率いた泉は、晩年には民博の設立にも携わります。彼がおこなった調査や研究をたどることで、戦後日本の人類学研究のあゆみをお話します。

第378回　12月5日(土)
時間●14:00～15:30(13:30開場)
人類学者×人類学者(6)
鳥居龍蔵、鹿野忠雄、馬淵東一―台湾に魅せられた人類学徒たち
講師　野林厚志(文化資源研究センター准教授)
日本の人類学者が海外ではじめて本格的なフィールド調査を行ったのが台湾でした。当時、未開の民と考えられていたオーストロネシア系の原住民族に向き合った3人の研究者の足跡をたどりながら、戦前日本の人類学のモードを探ります。

国立民族学博物館 友の会
電話　06-6877-8893
ファックス　06-6878-3716
電話でのお問い合わせは月曜～金曜日9時から17時までにお願いします。
http://www.senri-f.or.jp/
E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

ミュージアム・ショップ

特別展解説書
「自然のこえ 命のかたち―カナダ先住民の生みだす美」

広大な土地に多様な自然環境がひろがるカナダ。そこに暮らす先住民たちの、生活用具や儀礼の道具にみる造形美、版画や石彫などの芸術作品を紹介する特別展の解説書です。
カナダ文明博物館の協力のもと本邦初公開となった貴重な資料の数々を、カラーページをふんだんに用いて掲載しています。この機会にぜひ手に取ってご覧ください。通信販売もいたします。

「自然のこえ　命のかたち―カナダ先住民の生みだす美」
編集：国立民族学博物館　発行：昭和堂
B5変形版108頁(カラー66頁)
定価：1,995円(友の会会員価格1,796円)
発送手数料：400円

国立民族学博物館 ミュージアム・ショップ
電話　06-6876-3112
ファックス　06-6876-0875
水曜日定休
ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/
E-mail shop@senri-f.or.jp

みんぱくゼミナール

会場　国立民族学博物館 講堂
時間　13:30～15:00(13:00開場)
定員 450名(当日先着順)
参加費　無料

展示場をご覧になる方は、観覧料が必要です。

第377回　10月17日(土)
【総合研究大学院大学関連】
(文化科学研究科開設20周年記念)
極限の文化―人はどこで生きているか 生きられるか―
講師　廣川 和花(大阪大学総合学術博物館助教・大阪大学大学院助教)
池谷 和信・松山 利夫・近藤 雅樹(以上、民博教授・総合研究大学院大学教授)
飢餓、傷病、争乱…。人類は常にさまざまな極限状況に直面してきました。こうした危機を克服するために獲得し、生活習慣となって受け継がれてきたものが諸民族社会の文化です。食糧獲得加工の知識技術、呪術行為などの伝承や、それらの総体から創造された民族固有の神話・伝説に基づく世界像です。総合研究大学院大学文化科学研究科の開設20周年を記念して、文化誕生の秘密を探ります。

第378回　11月21日(土)
「変身」の美学―イヌイットと北西海岸先住民のアートの世界」
講師　大村敬一(大阪大学大学院准教授)
イヌイットと北西海岸先住民のアートには、「変身」をテーマにするものが多くあります。動物の身体が分割・変形されたり、人間が動物に、動物が人間に変身したりします。この講演では、イヌイットと北西海岸先住民のアートにあらわれる「変身」の表象を紹介しながら読み解き、その「変身」というテーマが彼らの生活の中でもつ哲学的な意味を解き明かします。

「人間のように振る舞うカリブー」
(国立民族学博物館蔵)

リン・サオ みんなで育む恋のものがたり

「イワシャー、ユー・ボー？（イワサ、いる？）」

夕食を終え一休みしていると、家の外から声が聞こえる。外を見ると近所に住む若者たちが、そわそわしながら集まっている。「リン・サオ」のお誘いである。

●巡回ラブアタック？

「リン・サオ」とは、ラオス低地農村部における伝統的な交際の形である。夕食が終わり、各世帯が就寝前の休息をとっているころ、時間にして夜の八時くらいになると、仲のよい年頃の若者が数人集まり、同じく年頃の女の子が住む家に訪ねて行く。

そこで女の子との会話の時間をつくり、しばらく話をしたら次の女の子の家へと順々に回ってあるく。日を変え訪問を繰り返すうちに、互いに気になる相手が定まってくる。そうなると友人たちは、その男を残して別の女の子の家に行き、一巡りしたら迎えに行って一緒に帰る。こうした交際の進め方がリン・サオである。

このとき集まったのも二〇歳前の若者たち。隣村へとリン・サオに行くことになったので、私にも声をかけてくれたのだ。

●恋の助け合い

この地域では、高床の家屋が一般的である。外から声をかけ、階段をのぼり屋内に上がる。

女の子とその家族はテレビを見ていた。おじいさんが若者一行を一瞥するとニヤリと笑い、女の子に残っていた食べ物とお酒を出すように言った。それをつまみに話がはじまる。学校での出来事や音楽の話などの世間話である。女の子と若者たちは、声は届くほどの、かといって近づきすぎない距離で、和やかに会話を楽しんでいる。

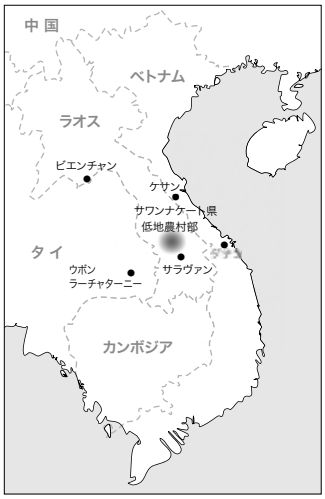
しばらくすると、一人を残し、私たちは別の家に向かうこととなった。女の子のいる家を二、三軒回ったあと、ある若者の家に集まった。その軒先でラオ・ラーオ（ラオスの焼酎）を回し飲みしながら話していると、今回のリン・サオのきっかけがわかってきた。どうも、残してきた若者が先ほどの家に住む女の子に好意を寄せており、彼を肴にリン・サオにやってきたようなのである。

ラオス低地農村部では、互いに助け合うことが重要な価値をもつが、なるほどその心はこうしたところにも垣間見える。一つの恋も助け合いのなかで育まれ、そのことで若者同士の仲もまた深まるのであろう。

●携帯電話が誘導する交際のプライベート化

しかしながら、近年になりこうした恋の形にも変化が生じている。都市部から中古の携帯電話が流入するに伴って、比較的安価に入手できるようになり、若者のあいだでも個人でもつ者が増えた。電話やメールでやりとりをし、約束を取り付けて会ったりしている姿も見かけるようになった。携帯電話の普及によって、交際のプライベート化が徐々にではあるが進んでいるのである。

こうした変化のなかで、リン・サオの形は変わってきたのだろうし、これからも変わっていくのだろう。ラオスの若者の恋のものがたりは、これからどのように育まれていくのだろうか。彼らの恋の行方に、おもわず思いをはせてしまう。



村の若者たちの晴れ舞台、ボートレースの練習風景。ボートレースなどの祭りが若者たちのもうひとつの出会いの機会となる

岩佐 光広（いわさ みつひろ）
民博 機関研究員
専攻は医療人類学、生命倫理学。ラオス低地農村部における看取りの実践についての研究とともに、通文化的な視点からの生命倫理学の再考に取り組んでいる。

収蔵資料情報の共有に向けて

ズニ博物館長の民博訪問

二〇〇九年一月二〇日、民博館長室に穏和な笑顔を携えた長身の男性がやって来た。北米先住民ズニ・プエブロのアスィウィ・アワン博物館（以下、ズニ博物館）館長、ジム・イノーテ氏である。

松園万亀雄館長（当時）と挨拶を交わすと、イノーテ館長はノートパソコンを起動させ、四〇分ほどのスライドショーを用いてズニ博物館の概要を紹介した。

●伝統的知識を若い世代に伝える

一九九二年、この博物館は約一万二〇〇〇人が生活するニューメキシコ州中西部のズニ保留地内に設立された。目的は、主として欧米諸国の博物館が保管するズニ関連の資料を利用して、失われつつある彼らの伝統的知識の一部を若い世代に伝える機会を確保することだという。そのため、ハーバード大学のピーボディー博物館、北アリゾナ博物館、マックスウェル博物館などと、収蔵品の情報共有に関する提携を結んできた。

人類学などの専門家ならば、「ズニ」という言葉を聞けば、ルース・ベネディクト、『文化の型』、アポロ型、といった語句を連続的に思い浮かべるかもしれない。あるいは、トルコ石と珊瑚と銀を素材とするジュエリーを思い浮かべる方もいるだろう。

しかし、一九九〇年代にNAGPRA（ナグプラ）（米国先住民墓地保護・返還法）を根拠にスミソニアン博物館と交渉して「戦争神」像を返還させるなど、政治力を行使する現代北米先住民コミュニティとしてのズニを思い浮かべる方はそれほど多くはいまい。

イノーテ館長の表敬訪問に際して、同席した私たち（岸上伸啓教授、五月女賢司機関研究員、筆者）は、その真意をくみとろうと彼の発言に細心の注意を払っていた。

松園館長が提供したズニ関連収蔵資料リストに目をやると、彼は「これらを収蔵庫で熟覧し、資料情報を閲覧させてほしい。将来的に資料情報をズニの人びとと共有するネットワーク構築に協力してほしい」という要望を提示した。

●博物館の役割を三〇年間議論

そもそも伝統的知識とは、美術工芸品などの動産文化財、聖地・遺跡など不動産文化財、写真・映像等民族誌的記録、生業・技術・医学的知識や生物多様性関連知識、フォークロアの表現、言語等を指す。

ズニのあいだではそれらの共有の範囲や伝達方法に多層性と一定のルールがみられる。たとえば、非ズニでもアクセス可能なもの、非ズニには公開しないもの、宗教結社の加入者やクラン成員にのみ知識の共有が認められているもの、結社やクランの特定の役職に就く人物しか管理しえないものなどである。

ズニ博物館は開館までの三〇年間を、モノや情報を収集・管理・公開する博物館の役割をめぐる議論に費やしており、イノーテ館長もこの点に関して慎重な姿勢をとっている。

民博の「標本資料目録データベース」（約二四万点）にて「ズニ」や「Zuni」を検索すると、木彫・石彫人形、土器、装身具など、数十点が確認できる。

その後、資料熟覧と管理情報閲覧を申請したイノーテ館長は、本年七月に来日し民博再訪を果たした。両館の次なる課題は、収蔵資料情報の共有に向けた具体案の構想である。

伊藤（いとう） 敦規（あつのり）
民博 外来研究員（日本学術振興会 特別研究員PD）
専攻は社会人類学。米国南西部先住民が制作するモノ（アート商品・博物館資料）と情報・知識の管理（先住民の知的財産問題）の相関性について人類学的に研究している。

イノーテ館長（左）は、「ズニのモノと知識の旅が今はじまった。次世代の博物館関係者と利用者のために協力を願います」と記した。右は松園前館長

多文化をささえる人びと

医療通訳サービスのある病院

りんくう総合医療センター市立泉佐野病院

異国で病気になったときほど心細いことはない。ことばの障壁から症状の説明もままならないうえ、生活習慣も医療制度も違う。医療通訳は多文化社会に必要不可欠である。日本ではまだ数少ないこの機能を備えているパイオニア的存在の事例を紹介する

吉富 志津代（よしとみ しづよ）
NPO法人多言語センターFACIL理事長
南米の領事館勤務などを経て、阪神・淡路大震災後は多言語コミュニティ放送局「FMわぃわぃ」設立を契機に、多言語環境促進や青少年育成を切り口とする在日外国人自助活動支援に従事。著書に、『多文化共生社会と外国人コミュニティの力』（現代人文社、二〇〇八年）などがある。

外国出身の住民との活動に携わるなかで、もっとも大切だと痛感しているのが、病院での意思疎通の問題である。ことばの理解が不十分な患者は、体調が悪くても我慢していたり、病院に一人で行って病状を理解しているようにみえても、かなり不安を残していたりする。実際にまちがって理解している場合も多い。

ことばはわかっても、しくみが異なるので納得できないなど、病院での意思疎通の問題は地域医療のコミュニケーションという観点からも、早急に考えなければならないことは自明である。

しかしながら現状は、医療機関が自らのサービスとして医療通訳を実施しているケースは少ない。外国人支援の市民団体や個人のボランティアに依存している場合がほとんどだ。

病院内の案内も多言語で表示している

中国人患者への産後指導は中国語通訳者が担当する

「軸足は地域に、目線は世界へ」を病院のスローガンに

りんくう総合医療センター市立泉佐野病院は、日本ではまだまだ数少ない医療通訳を導入している病院のひとつである。健康管理センターでは「国際外来」と「女性外来」の窓口を設け、「軸足は地域に、目線は世界へ」というスローガンのもと、地域医療の改善に尽くしている。

そのセンター長を務めるのが、南谷かおりさんである。この病院は関西国際空港の対岸に位置する関係もあり、受診外国人患者が二〇〇五年度に四七〇人を突破。看護師にアンケートしたところ、平均で年三回以上、外国人患者とのコミュニケーションで困った経験をもっていた。

そういうこともあり、二〇〇六年四月に予約制の国際外来を開設した。医療通訳を希望する患者は、観光客というわけではなく、むしろ日本に在住する外国人で、約七五パーセントを占める。

日伯両国の医師免許をもつ南谷さんは四カ国語を操って

南谷さんは日本放射線科学会専門医、検診マンモグラフィ読影専門医、人間ドック認定医でありながら、年間五〇〇件近いスペイン語、ポルトガル語、英語の通訳のうち、約七〇件をこなしている。設立初年度は八八件の依頼のうち、六九件を南谷さんがこなした。

現在は通訳者も六〇名近くになってはいるが、常勤で毎日病院にいる南谷さんへの依存は大きい。

南谷さんは、ブラジル国医師免許と日本国医師免許の両方をもつ医師であり、しかも、日本語、英語、ポルトガル語、スペイン語を理解するという希有な人材である。

父親の仕事の関係でブラジルに渡ったのは一一歳（小学校六年生）のときで、現地の学校に通いながら日本人補習校にも通い、ふたつのことばを習得していった。大学受験は、得意な科目で点数を稼いで合格したが、大学一年生のころはポルトガル語は理解できるものの、まだ流暢には話せないレベルだった。医学部の講義も全部は聞きとれず、いつも友達のノートを借りてうつして勉強していたとのこと。

ことばの置き換えではすまない医療通訳

ブラジルの医師免許を取得し、研修後二七歳で帰国し、日本の医師免許も取得した。日本の医師免許取得には、日本語能力試験一級に受かることをはじめ、さまざまな難しい条件をクリアして三年かかった。

医療の現場でコミュニケーションが十分にとれないことの不安を誰よりも理解している南谷さん。だからこそ、自分の専門部署がありながらも、院内を走り回って通訳することの意義を実感している。

医療現場の不十分なコミュニケーションは、医療機関側にとっても不安であるはずだ。医療通訳は、単なることばの置き換えではない。その背景にある社会、病院環境、患者の感情、医療機関側の専門的な視点（専門用語ではなくて）に配慮して、その患者にとっていかに最善の治療をするかが大切でありそれは医療の原点でもある。

がん患者が、通訳者が入ることで医師への信頼度を高め、安心して治療を受けた例もある。健康保険に入っていなかった外国人患者が、通訳を介して生活全般を知ることにより、適切な社会制度を活用できたケースもある。

ブラジル人患者に医療通訳中の南谷さん

ペルー人患者の相談にのる

医療機関への地道なサービス

南谷さんは、なによりも医療機関自体が医療通訳を理解する必要性を強調する。

二〇〇九年七月に開催された医療通訳士協議会シンポジウムでも「通訳を入れると治療率があがる」、「無駄な検査をしなくても診断ができる」という発表があった。欧米で医療通訳システムが発達したのは、医療通訳の存在が、早期発見、早期治療につながり、明らかに医療費の節約になるからだという報告もあった。

南谷さんは、日本語であろうと外国語であろうと、医療者側が、患者の理解度に合わせて十分な説明をする努力を訴える。同時に、日本社会も医療提供側への地道な啓発、多文化教育、外国人医療に関する証拠に基づいた情報を開示して、医療機関の認識そのものを高めることが必要であると指摘する。それには大学の授業などで医学生や看護学生などに、頭が柔軟なうちに教育することも効果的だと提案する。

医療通訳分野で遅れをとっている日本において、南谷さんのような医師の存在は、外国人患者の社会的通訳としても必然ではないだろうか。

南谷さん、医療通訳者、診察が終わり安心するブラジル人患者とその家族

ユーコン川の恵み

〈マスノスケ〉

カナダ北西部を水源とし内陸アラスカを流れて北太平洋に注ぐユーコン川には、多くのサケが遡上する。なかでもマスノスケ（キング・サーモン）はひときわ大きく、沿岸の先住民社会にとって重要な食料資源である

本日の漁果

井上敏昭（いのうえ としあき）
城西国際大学 福祉総合学部 准教授
専門は文化人類学。アラスカ先住民グィッチン社会の伝統的な狩猟・漁撈活動や食物分配の慣習と石油開発や資源管理とのあいだに生じる諸問題について、現地調査をおこなっている。

アラスカ内陸部の森林地帯を伝統的に生活圏とする先住民グィッチンは、毎年マスノスケがその地域を通過する六月から七月にかけて集中的に漁をおこなう。ユーコン川にはほかに、日本の食卓でもおなじみのシロザケやギンザケも遡上するが、かれらは「人が食べるべきサケ」としてマスノスケを真っ先に挙げる。

幅の広いユーコン川の河岸にへばりつくように仕掛けられた魚網やフィッシュホイール（サケ捕獲用の水車）には、全長一メートル近くあるマスノスケが一日に数尾かかっていることも珍しくない。

大事な保存食

獲ったマスノスケは、さばいたあと燻製にする。周囲に自生する針葉樹を燻煙材にもちいるが、そこに粘土状に朽ちた倒木の芯を加えると良い香りがつくという。これがかれらの社会に昔から伝わる保存法だ。

かれらが作る燻製は、我々が「スモークサーモン」と聞いて想像するものとは異なって、しっかりと燻煙して水分を飛ばしたものであり、日本にあるものではむしろ「とば」に近い。それでもマスノスケは脂がのっているので、ちぎるとオレンジ色の脂が滲み出してくる。

燻製にしたマスノスケは常温でも保存が可能であり、保存食としてだけでなく野外での携行食料としても活用されてきた。近年ではこれをさらに瓶詰めにしたり、あるいは燻煙加工せずに冷凍庫に貯蔵したりして、次の年までの食料として保存する。

食物分配の主役

かれらの社会で伝統的におこなわれてきた食物分配の場でも、マスノスケは主役である。カリブーやヘラジカなど大型哺乳類を対象とする狩猟の場合、集落を長く離れて猟行を重ねる必要がある。しかも、そこまでしても必ず獲れるわけではないため、集落に獲物が持ち帰られる機会はまれだ。

一方マスノスケは、数時間もあれば仕掛けた漁具から漁果を回収して集落に戻ることが可能なため、漁に携わる人の数も多く、通常の遡上量であれば分配するぶんを含めても充分な量が地域社会に供給される。マスノスケ漁をおこなっている人びとを調査したところ、かれらの多くは漁獲の半数以上を他の世帯に分配していた。その範囲は集落の外に及び、マスノスケが獲れない地域や都市部に住むグィッチンにまでマスノスケが行き渡る。

さらに、マスノスケの取り扱いの容易さも分配するのに好都合だ。カリブーなどの肉と異なり、特殊な技術がなくても解体できるし、燻製や瓶詰めに加工することでさらに扱いやすくなる。相手が高齢者であろうが都市部の住民であろうが、気がねせず譲渡することができるのである。パーキンソン病を患い出漁できない高齢者が一人で暮らす自宅を訪ねたところ、その家の冷凍庫には、マスノスケが七尾分貯えられていた。かれは「若い連中は俺のことを甘やかすんだよ」と言ってうれしそうに笑っていた。

社会資源として

現代のグィッチンは、このような食物分配に基づく互酬的社会を維持していることを誇りとし、自分たちのアイデンティティの基礎に位置づけている。であるなら、マスノスケは、かれらの日々の暮らしだけではなく、アイデンティティをも支えているといえるかもしれない。そのため、春から夏になると、マスノスケの遡上量が、地域社会の最大の関心事になるのである。

細切りにしたマスノスケを燻製小屋に吊るして燻製にする

燻製を瓶詰めにした「サーモン・ジャー」

サケ捕獲用の水車「フィッシュホイール」

上空から見たユーコン川

マスノスケ
Oncorhynchus tshawytscha

サケ科サケ亜科タイヘイヨウサケ属の魚類。北太平洋に注ぐ河川の上流部で孵化し、海に下って数年を海域で過ごしたのち、母川を遡上して産卵し一生を終える。ユーコン川では春から夏にかけて遡上し、河口から約60日間かけて3,000km以上離れたカナダの産卵地を目指す。浅瀬などでは群れを成したマスノスケで川面が赤く染まることもある。ユーコン川に生息する魚類のなかでも最大の魚種であり、体長1mを超えるものも珍しくない。

歳時世相篇 19

新たな祭りの創生競争
アフリカ、ザンビアにおける伝統の創造

人類学者の主要な研究対象のひとつである祭祀。多くの民族集団で構成されるザンビアでは1980年代以降、各民族が独自の祭りを創ることがブームとなっている。新しく生まれたこの「伝統」行事もまた、その生成過程を含めて、新たな研究対象になる。人にはなぜお祭りが必要なのか、自らにも問いかけてしまう

吉田 憲司（よしだ けんじ）
民博 文化資源研究センター

アフリカを中心に、仮面や儀礼、キリスト教の動向についてのフィールドワークを続ける一方、ミュージアム（博物館・美術館）における文化の表象のあり方を実践的に追究している。

南部アフリカのザンビアでは、一九八〇年代、主要民族が、「伝統をはじめよう」をスローガンに、競って民族単位の新たな祭りを生み出していった。

民族ごとに違う祭りが誕生

もともと、ザンビアには、民族をあげておこなうような祭りはほとんど存在しなかった。二〇世紀初頭以来続けられてきた祭りとして、わずかに北西部州ルンダ王国のウムトンボコや西部州のロジ王国の王宮の移動の祭りクオンボカが知られるだけであった。

後者のロジの王は、ザンベジ川の川岸と、川の中州の二カ所に王宮を有している。雨季と乾季で上下するザンベジ川の水位に応じて、中州の王宮と川岸の王宮の間を、王宮の資財や従者ごと、大きなボートにつんで、年に一度行き来することになる。クオンボカとは、そのための船団の移動を伴う大規模な祭りである。

こうした比較的古い祭礼と対抗するため、一九八〇年に東部州の民族ンゴニの人びとがンチュワラという祭りを再興する。ンチュワラは、その年の最初の収穫物を王に奉納する、いわゆる初穂の祭りである。

以後、一九八四年にその隣のチェワ人の祭りクランバ（収穫祭）、一九八八年ンセンガ人の祭りトゥインバ（雨乞いの祭り）など、数かずの祭りが創出されていった。

伝統をはじめよう

私は、一九八四年の第一回のクランバに立ち会った。「伝統をはじめよう」をスローガンに、本来は葬儀の際に踊られる仮面舞踊と、女性の成人儀礼の際に踊られる女たちの踊りを、それぞれの地域のチーフが王ガワ・ウンディに奉納するという、新たな祭りがつくりあげられた。

その折、村人たちと、「あと五〇年もして人類学者がやってきたら、きっとこの祭りがチェワの伝統的な祭りだと思い込むだろうな」と、笑いながら語りあったものである。

あれから二〇数年、すでにクランバは「チェワ伝統の祭りクランバ」と称されて、定着するにいたっている。

これに対して、チェワの隣に住むンセンガの人びとがつくりだした祭りトゥインバは、当時の王カリンダ・ワロが、自分で調査チームを立ちあげ、雨乞いについて古老から歌や伝承を集めて、自ら式次第を考え出した、まったく新しい祭りである。

差異化への志向

興味深いのは、こうした新たな祭りが、その時期と意味あいをそれぞれ別々のものになるように相互に差異化されている点である。

ンゴニのンチュアラは、その年の初めての実りを祝う儀礼であるから、雨季のさなかにおこなわれる。チェワのクランバは、収穫の祭りだから、乾季の初めに催される。そして、ンセンガのトゥインバは、雨乞いの祭りであるから、雨季を控えた乾季の終わりに開催される。

時期をたがえるのは、そのようにしないと、テレビで大きく報道されない、また、大統領や関係の大臣の臨席が仰げず、重要な陳情の機会を逃すといった事情からきている。政府も、直接資金を提供するということはなかったが、大統領・大臣の臨席をはかり、近隣の王、チーフたちの相互訪問のための交通手段を提供するといったかたちで、その動きを支援していく。

結果として、現在ではザンビアに七三あるといわれる民族集団のほぼすべてが、独自の祭りをもつようになっている。

次は博物館建設競争

こうした祭りの創生は、九〇年代に入ってひと段落する。そして九〇年代後半になると、今度は、各民族がそれぞれの民族の文化の展示を目的とした博物館の建設で競いあうようになる。祭りは一時的なものなので、そこで用いるような自分たちの遺産を、祭りを開く場所の近くで恒久的に展示しようという動きが巻き起こってきたのである。

ンセンガ人の祭り「トゥインバ」〈1993年 ザンビア、ペタウケにて〉

いち早く完成したのが、南部州のトンガ人の文化を対象としたチョマ博物館、そして前述の、船で王宮を移動する祭りクオンボカをおこなっているロジの人びとが川岸の王宮の隣に設けたナユマ博物館である。もともとジャン・ジャック・コベイルというカトリックの神父の手で集められた資料を収めたモトモト博物館は、一九七四年から国立の博物館のひとつになっているが、現在では、北部州ベンバ人のコミュニティ・ミュージアムとしての性格を強めている。

このほかにも、各地で続々と新たな博物館が建設されはじめている。先述のンチュワラの祭りを再興したンゴニの人びとは、地方行政府から払い下げを受けたホールを博物館に改装中である。

世界無形文化遺産に登録

一方、チェワの社会では、ニャウという仮面結社――筆者が加入している仮面結社である――の舞踊「グレワムクル」が、二〇〇五年、同じザンビアのルヴァレの人たちが継承している割礼儀礼にまつわる仮面舞踊マキシとともに、日本の歌舞伎などとならんで、UNESCOの「人類の無形文化遺産に関する代表的リスト」、いわゆる世界無形文化遺産に登録された。これをきっかけに、このチェワでも、またルヴァレでも、それぞれ祭りの場に博物館をつくろうという計画が動き出し、すでに設計図もできあがってきている。

世界遺産という制度にも後押しされるかたちで、このように、ザンビアでは、民族単位の博物館の建設競争がはじまっている。あと一〇年もすれば、祭りの場合と同様、またすべての民族集団がそれぞれの博物館をもつという状況が生まれそうな勢いである。

フィールドで考える

身に覚えのない疑い

洋の東西をとわず、時代を超えて存在する冤罪。その背景にはさまざまな要因があり、それぞれの社会の姿を映し出す。冤罪を晴らす手法もまた、各民族社会固有の文化として存在する

石田慎一郎
首都大学東京 都市教養学部 准教授
専門は法人類学。農村と裁判所での調査をもとにケニアの多元的法体制について研究してきた。最近は、オルタナティブ・ジャスティスの比較研究に着手している。

ケニア中央高地ニャンベネ地方の農村で調査を開始してから八年が経ったが、この間、まったく身に覚えのない疑いを突然かけられた人びとの苦境を垣間みることがあった。身に覚えがないのだからどうにかして身の潔白を証明しようと対処するケースもあり、場合によっては地域固有の対処法があることも学んだ。

その一方で、問答無用のまま容疑者とされたあげくに多大の苦痛を強いられた人もおり、それは耳をふさぎたくなるほど過酷で恐ろしかった。救いようのないほどに疲れきってしまった人を見たこともある。

誤認逮捕、不正、拷問、変死……

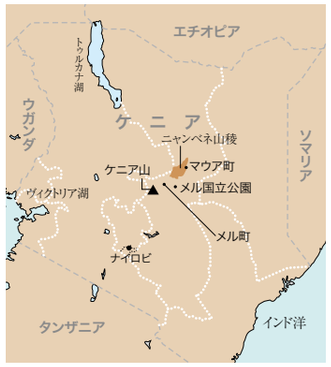
私が住み込み調査をしてきたアゼロ・ガイティ村に、武装強盗犯の容疑者として誤認逮捕され、過酷な囚人生活を強いられた若者がいる。ある日の夜間行動の偶然の一致により、犯人と誤認された可能性が高い。

強盗事件は二〇〇五年一〇月の夜に村内で起こった。被害者は、犯人グループのうち一名の顔をはっきり見たと証言したため、警察はその夜にその一名とたまたま一緒にいたこの若者を含めて三名を逮捕した。

ニャンベネ地方の裁判所の事務官

結局のところ裁判所は証拠不十分として無罪を認め、若者は釈放されたが、彼は判決が出るまでの数カ月の間に苦痛に満ちた囚人生活を強いられた。警察による家宅捜索の段階で、自宅敷地内から本人には全く身に覚えのない被害者の所持品が極めて不自然なかたちで発見され、犯行を裏付ける証拠とされた。

彼は一貫して無実を訴えてきた。私自身、この若者とは調査開始直後からつきあいがあって彼の人柄を知っていたので、彼がそのような犯罪に手をそめるはずがないと信じた。若者の無実を訴える村人三〇名ほどが警察署におしかけ、釈放を求めてデモンストレーションを決行したとも聞いている。



無罪確定後、彼から直接話を聞いた。取り調べ中の拷問、官憲の不正、囚人の変死など、想像を絶する容疑者・囚人待遇についての状況に、私は愕然(がくぜん)とした。

古来の呪術医的行為が疑念を生む

二〇〇五年八月、村のある老女が、集団リンチのさなかに救出された。救出が遅れていたら火をつけられて殺害されていた可能性もあった。彼女がそのような暴力にみまわれたのは、近所に住む少女を呪い殺そうとしたという疑いをかけられたことによる。

少女は、その数カ月前から学校や家庭で突然気を失うことが多くなり、診療所や病院に通っても一向になおらなかった。心配した父親が詮索したところ、少女は、老女の指図で不可解な儀式に巻き込まれたことを語った。そこから誤解がひろがり、集団リンチが起こった。

いったいどんな儀式をおこなったのか。問いつめられた老女は、それが乳幼児の体調不良を治すキエンゲレという古来の治療法で、次のような手順をふむものだとこたえた。

長老裁判で証言の順番をまつ老女

生きた羊の胴体に刃物で傷口をつくり、血がしたたりおちるままに二人がかりで担ぎあげる。担ぎあげられた羊の真下を、乳幼児を抱えた少女が通り抜ける。すると、その乳幼児が回復する。

老女の説明は続く。自分の友人の孫（乳幼児）の具合がおかしいので、偶然そこにいた少女に協力を求めただけで、少女を呪うようなことは一切していないと。

義兄弟の唾液がしみこんだ山羊肉を飲み込む

老女がいうところのキエンゲレは、確かにかつて使われていた治療法で、乳幼児の先天歯（グワニ）の治療などとあわせて施されていたものだ。村の長老たちのなかには、その効果を認める者もいた。

しかし、少女もその父親もキエンゲレがなにかを理解できなかった。しかも、老女の息子の一人がかつて病死したさいに、死因を老女によって呪い殺されたのだとする噂がささやかれたことがあった。このことを想起した父親はますます疑いを強め、近隣住民も巻き込んで恐怖心は膨張した。村の長老たちは、老女に無罪宣誓させることにきめた。

村の長老たちの手引きにより、老女は誰も呪い殺そうとしていないと宣誓し、彼女の義兄弟（ムイシアロ）が噛みくだいた一切れの山羊肉を飲みこんだ。

山羊を連れてきた老女。この山羊の肉が宣誓に使われた

それには、義兄弟の唾液がしみこんでいる。ニャンベネ地方では、義兄弟は相互に特別な力をもつ関係にあり、もし宣誓で嘘をつくと、この唾液が嘘つき本人とその家族に、将来いつか恐ろしい災厄をもたらすと信じられている。これはいわゆる神判・試罪法で、詐欺や盗難の疑いや、言った言わないをめぐるトラブルへの対処法としても頻繁に利用されている。

冤罪の根底にあるもの

現場に身をおいて当事者から見聞きするたびにおもうが、身に覚えのない疑いはほんとうに恐ろしい。ケニアの農村で、これらの事例をふくめて、一方的な疑いに由来する暴力がむきだしのまま見えてしまったとおもうことがしばしばあった。

しかし、これは遠い調査地だけの話ではなさそうだ。最近、殺人事件や痴漢事件での冤罪を伝える国内報道に触れ、とつぜん疑いをかけられて自由が奪われること、逆に特定の人を疑ってしまうことの残酷さをあらためて感じた。

ぬれぎぬ・冤罪は、知識や情報の欠落や思い違いだけに由来するのか。それ以外の何かにもよるのか。簡単な問いではないが考えていきたい。

編集後記

旧暦10月は、全国の神々が縁結び相談のために集まる出雲では神在月（かみありづき）、他では神無月（かんなづき）と呼ばれる、という説は、中世から神社の宣伝・参詣の世話を職業とした御師（おんし、おし）が、神無月という宛字表記に乗じて広めた俗説らしい。旅行業者たる御師の作り出したイメージが一人歩きするのは、現在と同じで興味深い。

今号のインタビューでは、加藤九祚名誉教授からお話しを伺った。縁結びに引き寄せれば、加藤先生のお人柄こそが、人と人、人と物を結び続けてきた原動力に相違ない。社会の分断が進む今、こうした横方向の結びつきは尊い。同時に、人生の節目節目を新たな展開につなげていく先生の前向きな生き方は、退職者や退職を控える人びとへのエールとなるだろう。現に、地元武蔵野市などでの講演を通じて加藤先生に魅せられ、若年や壮年だけでなく熟年ファンの輪が広がり、中には毎年、先生と一緒にカラテパを訪れるリタイアの方々もおられると聞く。「リタイア組の星」でもある加藤先生、定年の近い私も見習いたいと思う。（久保正敏）

次号の予告

特集 **ヨーロッパのパン**

月刊みんぱく
2009年10月号
第33巻第10号通巻第385号　2009年10月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話　06-6876-2151

発行人　西尾哲夫
編集委員　久保正敏（編集長）　佐々木史郎　庄司博史
中牧弘允　信田敏宏　山中由里子
協力　財団法人 千里文化財団
制作　京都通信社
印刷　市蔵図書

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館企画連携係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

●時間　14時30分から15時30分（予定）。
★10月11日（日）は、11時から12時（予定）
●特別展示場および常設展示場観覧料が必要です。
＊都合により、予定を変更することもあります。

国立民族学博物館（みんぱく）の研究者が、来館された皆様の前に登場します！
「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」などなど、話題や内容は千差万別！
どんどん質問もおよせください。展示場でお待ちしています。

10月の開催

10月4日（日）
話者：南真木人（研究戦略センター准教授）
話題：チトワン国立公園と住民の生活権
場所：常設展示場入口

10月11日（日）
★この日のみ11時から12時（予定）
話者：關雄二（研究戦略センター教授）
話題：黄金の墓の発見と発掘秘話
場所：常設展示場内

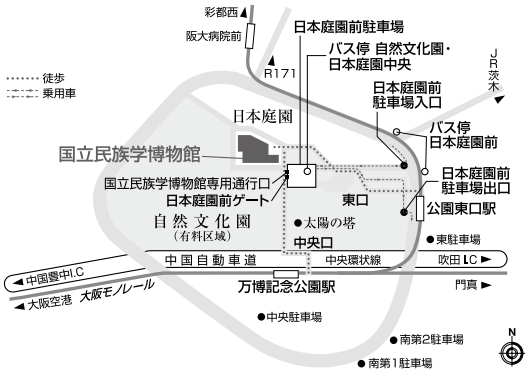
国立公園緩衝地帯のナラヤニ川中州でカヤを刈りとり、渡し舟で村にもどる女性たち

10月25日（日）
話者：印東道子（民族社会研究部教授）
話題：オセアニアの人びとの資源利用
場所：オセアニア展示

1年間みんぱくに何度でも入館できる
「みんぱくフリーパス（3,000円）」をご利用ください。
常設展は何度でも無料で入館できます。
他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

特典◆常設展の無料入館
◆特別展の観覧料割引
◆みんぱくミュージアム・ショップとレストランの10%割引
◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引　など。

詳細については、財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
（電話06−6877−8893／平日9：00〜17：00）



交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分
●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分（茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください）。
●自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ
http://www.minpaku.ac.jp/